

桜坂の花のように

まだ幾分肌寒い日があるものの、校地内の桜やケヤキの樹々の枝先にはふっくらとしたつぼみがのって、これから萌え出る花や葉を微かな輪郭として予感させる。

4月6日に入学式が行われ、新鮮な決意に満ちた入学生を迎え入れた。昨年創立110周年を迎え、今年の1年生からはカリキュラムや授業時間、学期制などのシステムが変更になった。今年の新入生たちは10年後の120周年へ向けて、新しい方向へ、新しい一步を踏み出す学年である。

先日行われた新入生歓迎会で、生徒会や野球部、応援団などが息のあったパフォーマンスでエールを送ってくれた。まっすぐに見つめる初々しい新入生に、先輩たちの思いや本高の伝統は確かに受け止められて、本高の111年目の1ページ目に最初の文字が書き記された。

2年生、3年生もそれぞれに今年という年が自分にとってどのような意味を持つ時間であるかは、理解しているだろう。学校行事や部活の主体者として、あるいは9か月後のセンター試験に挑む受験生としてそれぞれに期するものがあるはずだ。

もう1週間もすれば、桜坂のさくらもほころび出すだろう。咲き初め、二分咲き、五分咲き、八分咲き、満開、散り初めと、さくらはどのステージにあっても趣があり、その時々のおもいととも心に残やかな映像を残す。微かに風に揺れる花びらは、見上げる人々の思いが結晶してできているようにも思われる。



桜坂からの道は、先輩たちが花を見上げたその時々のおもいにまで思い巡らす道であり、あの坂を登り降りする度に、本高に満ちているスピリットを吸い込み、伝統を受け継ぐ者としての本高生になる道程である。

さて、その桜である。校門へ続くあの坂に桜の木が植えられ、桜坂と名付けられたことの背景には、本高生は桜木のごとくあれという願いがあったのではないか、と思われてならない。花卉の一枚一枚の繊細さは鋭敏な心のような。その花が一斉に開花し、爛漫と咲き誇る様は活気に満ちた学校生活であり、ほころんだ花の一つ一つは誇らしげな一人一人の笑顔だ。そして、散り際の潔さは決断の早さと潔い覚悟にもつながろう。

陽春の光の中で人々に愛でられる桜の花は確かに美しいが、この北東北の冬を耐える桜木の立ち姿は、人々を無言で励ましているかのようだ。猛烈な吹雪と酷寒にさらされて、枝は氷や雪の塊になる。凍結を防ぐために樹皮は厚さを増して、幹は来るべき時に備えて凍土の中で根を張っている。木の中より生ずるつぼみは、最も厳しい冬の後、堅い樹皮を破って顔を出す。あの柔らかく繊細なふくらみのどこにそんな力が秘められているのかと思う。さあ本高生よ、今年も桜坂の花のようであれ。